書評『ラサ憧憬　青木文教とチベット』高本康子著

（芙蓉書房出版、二〇一三年一〇月二三日刊）

三谷真澄

高本康子（こうもとやすこ）氏は、東北大学国際文化研究科博士課程後期修了、博士（国際文化）。東北大学大学院国際文化研究科専門研究員、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター非常勤講師、群馬大学非常勤講師を経て、現在は、北海道大学スラブ研究センター研究員である。専門は比較文化論、日本近代史。

高本氏は、二〇〇八年一二月二〇日に、青木文教師の生家である滋賀県高島市の正福寺の現住職青木範幸氏とともに、龍谷大学大宮図書館所蔵の「青木文教師将来チベット文化資料」を閲覧された。そのおり、評者は、その研究調査に同行し、高本氏の青木文教研究に対する見識の高さと、研究への熱意を感じたのである。

その後、高本氏は精力的に資料収集され、特に、中根千枝氏によって国立民族学博物館に寄贈された「国立民族学博物館青木文教師アーカイブ（以下民博アーカイブ）」八八点の目録化をなしとげられた。同資料など、これまでの研究成果をもとにして、出版されたのが本書である。

また、高本氏は、大谷光瑞師（一八七六―一九四八）の命日である一〇月五日の翌日にあたる二〇一三年一〇月六日、「青木文教師入蔵百年記念講演会」に招かれ、龍谷大学元学長の上山大峻氏とともに講演された。本講演は、正福寺住職が園長を務められる中央ユニバーサルこども園のホールで行われたもので、民博アーカイブや正福寺所蔵資料を中心として、青木の求め憧れたチベット・ラサについて熱っぽく講演された。

本書以前に、発刊された主な著書は以下の通りである。

・長野泰彦・高本康子編『国立民族学博物館青木文教師アーカイブチベット資料目録』国立民族学博物館図書委員会アーカイブズ部会（二〇〇八年）
・高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』芙蓉書房出版（二〇一〇年二月）
・長野泰彦・高本康子『西蔵（チベット）全誌　青木文教』芙蓉書房出版（二〇一〇年四月）
・高本康子『チベット学問僧として生きた日本人　多田等観の生涯』芙蓉書房出版（二〇一二年二月）

本書は、そこで調査対象となっていた青木の著述、手稿・書簡類の他、回想・随筆等の文章や写真類、新聞記事の切り抜き等の遺品も資料として使用している。つまり、青木にかかわる、ありとあらゆる資料を視野に入れて、「青木文教」の実像に迫ろうという試みがなされているのである。

さて、書評に入る前に、先ず、本書の目次を列挙しておく。

第一章　チベット以前
第一節　なつかしき高島野
第二節　京都府立二中
第三節　仏教大学での生活
第二章　大谷探検隊
第一節　大谷探検隊の活動

第二節　最初のインド滞在
第三節　再びのインド滞在
第三章　チベットへの道
第一節　三たびインドへ
第二節　チベットへ
第三節　チュンコルヤンツェ滞在
第四章　ラサの日々
第一節　留学生活
第二節　青木の見たラサ
第五章　「神地」との別れ
第一節　出発まで
第二節　ラサを出て
第三節　「第二の故郷」へ
第六章　『西蔵遊記』
第一節　『西蔵遊記』出版まで
第二節　『西蔵遊記』出版以後
第七章　戦時下で
第一節　東京へ
第二節　大陸での活動

第八章　「チベット学」の軌跡
　第一節　戦後の青木
　第二節　青木のチベット研究
　第三節　逝去
第九章　「青木文教」
　第一節　資料のゆくえ
　第二節　顕彰活動
青木文教年譜・著作

本書では、節毎に細かい見出しが出され、読者への便宜が計られているが、ここでは割愛させていただいた。この中で、評者が注目したのは、以下の三点である。

1仏教大学時代の青木文教
2チベット学への貢献
3将来資料の周辺

1仏教大学時代の青木文教

これは、おそらくはじめての論究であろう。仏教大学は、現在の龍谷大学であり、青木は、一九〇七年三月に京都府立二中を卒業して、仏教大学に入学している。しかしこの時期の青木の動向はほとんど知られていなかった。高本氏は、「この時期に彼は大谷光瑞に見出され、チベットを目指すこととなった。光瑞に見出されるその

きっかけが、この時期の青木にあったのではないかと筆者は考える（二九頁）」とし、青木の仏教大学在学時代に何があったのかを探ろうとする。『龍谷大学三百年史』を手がかりとして、当時の教育体系を確認し、予備科、本科（第一科、第二科、第三科）のうち、彼の所属したのは、第一科（学者の養成を目指したもの）であったと推論している。その根拠は、この本科三科のうち、第一科第二学年のみが「梵語巴利語西蔵語蒙古語」が含まれていることである。

本『佛教學研究』は、いわゆる宗乗・余乗のうち、余乗の伝統を汲む「仏教学科（あるいは仏教学専攻）」の研究誌であるが、本学でいつからチベット語が講義され始めたのかについてはあまり言及されてこなかった。青木文教や多田等観が、初期チベット学のパイオニアであったことは周知の事であるが、彼らが若き日に学んだ科目等は、ほとんど視野に入ることが無かったのである。その点で、高本氏は、青木の学んだ仏教大学における学問的状況を、事実に即して明らかにしようとしている。また、一九〇七年に渡辺哲信、前田慧雲による大谷探検隊の報告講演が行われていることや、中国揚子江へ沿岸への「修学旅行」も経験したことも、海外への関心を喚起したであろうことが「青木が年相応の、いわば素直な感性を持つ青年であったとすれば、学内の雰囲気が彼に影響した可能性は、決して小さくなかっただろう。（三六頁）」とされている。本願寺の機関誌『教海一瀾』の記述もからめて、当時の仏教大学の学問的状況をできるだけ復元しようと試みているところは、傾聴に値する。

2 チベット学への貢献

青木文教のチベット学への貢献について、山口瑞鳳氏は、「チベットに入った人々のうちで、チベットの仏教そのものに深い理解を示していたのは、何としても、滞在のもっとも長かった多田であった。後のチベット学に関する貢献については青木も加わる。[1]」とされ、「チベット学」への貢献という点で青木を評価しておられる。

確かに、後に挙げるように、彼の将来品は多田等観や河口慧海の場合と異なり、大蔵経がなく、多種多様なチベット文化資料と評すべきものである。しかし、そのことによって、彼のチベット学における業績を、不当に過小評価されてはならないと評者は考える。

高本氏は、チベットから帰国後のチベット学への関わりを知る重要な資料を研究している。それは、氏のあげる『西蔵全誌』（民博アーカイブ番号 321-371）（二三三～二三六頁）と「唐蕃会盟碑」の研究資料（民博アーカイブ 236）（二三六～二三八頁）である。

評者は、この資料を国立民族学博物館にて実見する機会を得たが、非常に目に付いたのは、「喇嘛教」という名称に対する青木の態度である。たびたび「西蔵仏教」と呼ぶべきことを提唱している。特に『西蔵全誌　下編』第七章　喇嘛教（民博アーカイブ 359）では、「西蔵佛教＝喇嘛教」と表現されており、チベット仏教が、邪教や淫靡な土着宗教とみなされることを警戒している。それは、一般の誤解を解こうとする、仏教者・仏教学者としての真摯な態度である。

現在の仏教研究者の間では、堕落した仏教、民間信仰と混淆した土着宗教、低次元の宗教という語感と誤解を生む「ラマ教」という呼称はやめ、中国仏教、日本仏教という表現と同様、その地域固有の受容と変容を経た仏教という意味で、伝播した地域の名称を冠して、「チベット仏教」と呼ぶことがふさわしいとの共通認識がある。

それをすでに、「昭和廿一年（一九四六）」の段階で提唱されているのである。「西蔵の場合はその国柄だけに誰もが誤った概念を懐く傾向にあることは事実である。本誌執筆の目標とするところは一にその正しき概念の獲得にある（一八四頁）」と記述されているにもかかわらず、青木の声は届かなかった。しかし、その見識の確かさは、この書を通じて知らしめられるところとなるであろう。

3 将来資料の周辺

青木文教師の将来資料や関係遺品などの情報が、第九章に置かれている。青木文教師関連資料の概要、各所蔵機関の所蔵状況、収蔵経緯、内容目録等がまとめられており、非常に便利なものである（二四五～二五八頁）。高本氏の提示する順序によって以下に列挙する。

①正福寺所蔵資料
一六八点（高本氏のリスト[12]あり）

②国立民族学博物館所蔵資料
・「青木文教師将来チベット民族資料」（一四二点、一九七九年受入）
・「青木文教師アーカイブ」（八八八点、二〇〇一年受入）

③徳富蘇峰記念館資料
一二点（書簡、七点が絵はがき）

④龍谷大学資料
・「ラサ鳥瞰図」
・「青木文教師将来チベット文化資料」（二〇〇〇年、二〇〇二年受入）二七二点

⑤東京大学資料
一三点（チベット語資料）

④の龍谷大学資料については、かつて本誌『佛教學研究』に龍谷大学大宮図書館に保管される「チベット文化資料」について、評者は、その概要と主要資料について記したことがある。[13]

一方、青木の人生に大きな影を落としているのが、いわゆる「大正の玉手箱事件」④である。中央チベット・ツアン州ギャンツェのパンコルチューデ（白居寺）の写本大蔵経をめぐる、河口慧海との一連の論争を指す。現在、東洋文庫に保管されている河口慧海将来「テンパンマ」写本カンギュルがそれである。青木より先に帰国した河口は、ダライラマ一三世より大谷光瑞師への写本カンギュルを託されたが、それが結局光瑞師にわたることはなく、その帰属をめぐって『中外日報』紙上で一九一七年七月一五日～九月二〇日まで、計七五回の記事が掲載された。青木は、光瑞師の意志もあり、この争いを避けて南洋へ派遣され、これ以後、チベット学者としては「不遇」の人生を送ることとなってしまう。

高本氏は、「両者の意見の対立は、同時期に青木と河口という二人の日本人から別個にチベット大蔵経の寄贈を依頼されたチベット政府首脳のこれに対する対処の仕方に基因する」という奥山直司氏の見解⑤に同意（一六九頁）する一方、これ以後、青木は「不遇」あるいは「孤立」とか言われる打撃については、「青木が受けた本当の打撃は、仏教界および、一般社会におけるチベットへの関心の変化、既に述べたようなチベット現地に対する関心の退潮によるものであったと思われる。（一七一頁）」とし、別の視点から指摘している点は特筆すべきものである。毎日新聞への連載打ち切りなどを含め、今後の検証が待たれるところである。

おわりに

高本氏は、青木の生前には日の目を見ることのなかった『西蔵全誌』を録文し、出版した。氏の努力が報われるとともに、当初より出版を前提として準備をしていた青木の思いも形になったのである。本書の冒頭「はじめに」で、氏が触れているように、青木自ら「予はたとひ英京や独都の最遊は希はずとも『神地（ラッサ）』の理想郷に今一度遊学するの機会を得たいと思つて居る」（『西蔵遊記』内外出版、一九二〇年、三七四頁）と語り、

その後の人生を通じて、「その心底には、『チベット』への素朴な、しかしそれだけに強い、憧憬の念があった（一～二頁）」と高本氏は考えている。

本書は、青木文教を追跡しつづける著者の、青木文教という人物への学問的探求心と、彼への愛にあふれた書物である。二〇世紀初頭にチベットに入り、首都・ラッサで市井の生活に密着した青木文教の人となりや学問への情熱など、草創期のチベット学のパイオニアに触れることのできる好箇の書である。

註

① 山口瑞鳳『チベット上』（東洋叢書3）第一章「旅行者の目から」（入蔵した日本人）の項参照。東京大学出版会、一九八七、一〇八頁

② 高本康子「表3　正福寺資料一覧」「大谷探検隊関係入蔵者資料の現状―青木文教資料を中心に」（白須淨眞編『大谷光瑞と国際政治社会』勉誠出版、二〇一一）一七七～一八一頁

③ 拙稿「龍谷大学所蔵青木文教師収集資料について」『仏教学研究』60・61合併号、一～二六頁、二〇〇六

④ この事件を巡る主要な論文は下記の通りである。

・棚瀬慈郎「旧 India Office 所蔵　チベット関連ファイルの中の『大正の玉手箱事件』関連史料について」『チベット文化研究会報』34-1、二〇一〇、二八～二五頁

・奥山直司『評伝　河口慧海』中公文庫、中央公論社、二〇〇九（二〇〇三）

・奥山直司「青木文教と河口慧海―『西蔵大蔵経問題』」白須淨眞編『大谷光瑞と国際政治社会』勉誠出版、二〇一一、一二九～一五九頁

⑤ 奥山直司二〇一一、一三一～一三二頁参照。

キーワード　ラサ、青木文教、高本康子